

アーカイブズとしての文学館

橋 口 里 菜

【要 旨】

かねてから課題であった文学館とアーカイブズの関係について考察するため、アーカイブズ組織の特徴である「出所・原秩序・階層構造に根ざしてその本質・構造を分析」という観点から、文学館の刊行する目録やネット上に公開するデータベースの現状を調査した。結果、文学館では文庫・コレクションといった資料群ごとの管理がなされていたものの、資料の出所よりも一文学者に関する資料であるという性質が重視されていることが判明した。文学館の目録は、階層構造に根ざした編成ではなく、図書・雑誌、原稿、遺品といった形態別に分類されているものが多く、データベースも同様の傾向にあることが判明した。

さらに、文学アーカイブズの編成記述が可能か検討するため、三鷹市山本有三記念館を例にシリーズ設定を行った。作家という個人活動を階層構造で表すため、タイトルごとにシリーズを編成したことにより、文学アーカイブズの編成記述は可能とわかったものの、シリーズ項目が多くなってしまうこと、資料整理に時間と知識が必要なことから、形態別分類が主流となっている文学館に編成記述を導入する必要性は低いことも明らかになった。しかし、文学アーカイブズを編成記述することによって、形態別分類で拡散してしまった関連資料がまとまり、文学作品のプロセスが多くの利用者に理解できるようになるため、文学アーカイブズの利用促進につなげる可能性を見出すことができた。

【目 次】

はじめに

1. 文学館とアーカイブズ

(1) 文学館の機能をめぐる議論

(2) アーカイブズ学の定義

2. 文学館の目録とデータベース

(1) 目録

(2) データベース

3. 文学アーカイブズの編成記述

おわりに

はじめに

文学館同士の情報交換、相互協力のための組織である全国文学館協議会の会則において、同協議会に加入することのできる文学館は「我が国の文学に関する文献・資料の収集・保存、閲覧、展示等の事業を行っている、またはこうした事業を行おうとしている、施設または組織」¹⁾と定義されている。文学館は文学者の直筆原稿などを所蔵している点で文書館としての機能を有するとの指摘があって以降、それ以上の議論が未だ行われていない現状を踏まえ、本論では、アーカイブズ学からみた文学館や「文学アーカイブズ」の取扱いについて検討したい。

1. 文学館とアーカイブズ

(1) 文学館の機能をめぐる議論

2021年現在、全国文学館協議会には104の施設、組織が加入しているが、文学者の記念館として開館の早い小泉八雲記念館（松江市、1933年開館）や観光地として人気のある宮澤賢治記念館（花巻市、1982年開館）など同協議会に加入していない文学館も多い。北海道立文学館の初代館長であった木原直彦による「全国文学館等一覧（2017年改訂版）」²⁾には、745施設が挙げられており、図書館情報学の立場から文学館を論じた岡野裕行の「文学館一覧」³⁾には763施設が紹介されている。ここに示された一覧には、文学館単独の施設だけでなく、博物館や図書館内にある文学者の展示コーナー、常設展示はないものの資料を収蔵している施設といった多種多様な形態の施設が含まれ、そのほか文学者だけでなく美術家や思想家、歴史上の人物を扱う施設などもある。木原は採録範囲の参考文献に『日本近代文学大事典』（日本近代文学館編、全6巻、講談社、1977～1978年）を挙げているが、「実質は非常に曖昧なものであり、文学館の一覧に含まれているのが疑問な施設も多数ある。」⁴⁾との評価もある。また、木原は2017（平成29）年の一覧改訂で調査を終え、岡野も同年の更新を最後に「文学館一覧」を公開していたウェブサイトのを休止している（閲覧は可能）ため、文学館の全体像の把握にはさらなる調査、研究が望まれる。

文学館の草分けである日本近代文学館が1967（昭和42）年に開館して以降、文学館は日本全国に広がった。1995（平成7）年に全国文学館協議会が発足すると、文学館に関する研究が多くみられるようになる⁵⁾。そこで議論の中心となったのは文学館の機能論である。日本近代文学館理事長（現、名誉館長）の中村稔は文学館の持つ機能として、文学資料、研究書等を収集・保存・整理し研究者の閲覧に供する図書館的機能と収蔵品を広く展示し、公衆の閲覧に供する博物館的機能を挙げた⁶⁾。以来、この文学館のもつ図書館的機能と、博物館的機能という捉え

1) 全国文学館協議会事務局「会則」（『全国文学館協議会会報』8号、1998年、p.64）。

2) 木原直彦「全国文学館協議会一覧」（『全国文学館協議会会報』69号、2017年、p.17）。

3) 「文学館一覧」文学館研究会ウェブサイト <https://hiroyukiokano.wixsite.com/literarymuseum/list>（2021年9月27日最終確認）。

4) 種井丈「文学館機能の整理と検討」（『國學院大學博物館學紀要』37輯、2012年、p.117）。

5) 岡野裕行「文学館研究の転換期—全国文学館協議会の発足と文献数・文献内容の変化—」（『日本図書館情報学会誌』54巻4号、2008年、p.278）。

6) 中村稔2011『文学館を考える 文学館学序説のためのエスキス』（青土社、2011年、p.19）。初出、中村稔「随想—文学館学序説のエスキスのために（3）」（『日本近代文学館』167号、1999年、p.1）。

方をもとに、文学館の機能論が多様なかたちで発表されるようになった。それぞれの機能論の内容と問題点は、小国七慧による「全国文学館協議会設置後の文学館研究における文学館機能論の問題点について」⁷⁾に詳しいため参照されたい。以下に、アーカイブズ学と関わりのある先行研究を紹介する。

2007（平成19）年、文学研究者の鳥羽耕史は文学館の3つの役割を挙げた。1つは、系統だった図書資料を収蔵する図書館としての役割、2つ目は作家愛用の品など一点限りの物を収蔵する博物館としての役割、そして3つ目は、生原稿等の貴重文書を収蔵する^{アーカイブズ}文書館としての役割である⁸⁾。岡野裕行はこの鳥羽の言及に呼応するように「手稿資料の収集については、文書館としての機能を有すると表現することもできるだろう。」⁹⁾と述べている。そして、種井丈は『博物館学史研究事典』の「文学館論史」において、「鳥羽の論によって文学館機能論は一つの終着を迎えた」¹⁰⁾と結んだ。しかし、鳥羽の挙げた手稿資料など貴重文書の収蔵は博物館や図書館でも行われることであり、資料収集の一側面に言及したに過ぎないものといえる。

さらに岡野は、「文学館は図書館・博物館・文書館のどの領域に含まれるのか」という課題に端を発した論考において、「三分法の限界」と称し、文学館を図書館・博物館・文書館のいずれかの領域に線引きすることに意味があると思えず、文学館の議論の幅を狭め、可能性を小さくしてしまうだけだとした¹¹⁾。また、博物館・図書館・文書館がお互いの業務を提携する取り組みであるMLA連携を、「外なるMLA」と「内なるMLA」という二つの観点で捉え、前者を一般的な施設間での連携、後者を「一つの施設の中で、博物館的な機能、図書館的な機能、文書館的な機能の3種類の機能を有するものとみなす」¹²⁾こととし、「内なるMLA」を担う施設に文学館を挙げている¹³⁾。

次に、アーカイブズ学上の文学館に関連した言及を紹介したい。『アーカイブズ学の科学 上巻』では「文学アーカイブズ」¹⁴⁾という語が見られ、根本彰の『アーカイブの思想』では、「たとえば政治家や作家が遺した書簡や日記、原稿類は文書や記録とは言えますが、それ自体ではアーカイブとは言えません。これを意図的に遺してまとめて整理したり、記念館、図書館や文書館で管理されたりすることで初めてアーカイブズになると言えます。」¹⁵⁾「作家の原稿や書簡類も皆アーカイブ予備軍であり、これが文書館、図書館、博物館（資料館、文学館）に移され

7) 小国七慧「全国文学館協議会設置後の文学館研究における文学館機能論の問題点について」（『國學院大學大学院紀要—文学研究科—』51輯、2019年、pp.99-118）。

8) 鳥羽耕史「文学館の役割 貴司山治展とブンガクな時代展をめぐって」（『日本近代文学』76集、2007年、p.339）。

9) 岡野裕行「図書館としての文学館」<https://researchmap.jp/okano/misc/208778>（2009年、p.1、2021年9月27日最終確認）。初出、岡野裕行「「図書館としての文学館」試論 文学館研究の確立とウェブの活用構想」（ACADEMIC RESOURCE GUIDE（ARG）メールマガジン363号、2009年）。

10) 種井丈「文学館論史」（青木豊ほか編『博物館学史研究事典』雄山閣、2017年、p.247）。

11) 岡野裕行「文学館の自己認識とその領域」（『文学館研究』1号、2009年、pp.9-10）。https://researchmap.jp/okano/published_papers/208777（2021年9月27日最終確認）。

12) 岡野裕行「内なるMLA連携—日本近代文学館」（NPO知的資源イニシアティブ『デジタル文化資源の活用』勉誠出版、2011年、p.111）。

13) 岡野前掲論文、pp.103-113。

14) 丑木幸男「序 アーカイブズの科学とは」（国文学研究資料館史料館『アーカイブズの科学 上巻』柏書房、2003年、p.2）。

15) 根本彰『アーカイブの思想』（みすず書房、2021年、p.14）。

て管理されるときにアーカイブズとなると言えます。」¹⁶⁾とあり、文学者の残した資料や文学館がアーカイブズ学で扱われる範疇であることがわかる。

(2) アーカイブズ学の定義

渡辺浩一は記録史料であるアーカイブズを「行為の痕跡が媒体にとどめられた記録のうち、組織や社会により共用化されたもの。」¹⁷⁾と定義した。文学館に所蔵される資料には、文学者の著作や文学者に関する書籍・雑誌、文学者の旧蔵書、肉筆原稿、書簡、愛用品、写真、映像などがあり、どれも文学者の行為をとどめたものである。そして文学館はこれら資料を展示したり、閲覧希望に対応したりすることで共用化する。同じく渡辺は、アーカイブズ組織である文書館の基本機能に、記録のライフサイクル論に基づく「移管・収集・評価選別・記述編成(検索手段)・共用(公開・レファレンス・普及活動)」を挙げている¹⁸⁾。文学館は、文学者やその遺族、収集家から資料の寄贈・寄託を受けるほか、古書店などから資料を購入して資料を収集する収集アーカイブズであり、原則資料の廃棄は行わない。収集した資料は整理して検索手段となる目録・リストを作成後、展示や閲覧を通して共用化しており、文学館はアーカイブズ組織の基本機能を満たしているといえるだろう。

1985(昭和60)年に安藤正人は、欧米文書館学の基本原則である「[出所原則]と[原秩序(原配列)尊重の原則]」にもとづく史料整理とは、結局のところ、「史料群の階層構造」を再構成し、呈示することにほかならない¹⁹⁾と述べた。この2つの原則は1996年の「ICA アーキビストの倫理綱領」²⁰⁾(ICA: 国際文書館評議会 International Council on Archives)に文書館の理念として示されている。これらを受け、藤實久美子はアーカイブズ組織の特徴のひとつに「出所・原秩序・階層構造に根ざしてその本質・構造を分析」²¹⁾することを挙げている。文学館は資料を出所・原秩序・階層構造に根ざして分析しているのだろうか。文学館が資料をどのように分析しているのか把握するため、日本近代文学館を中心に文学館の刊行する目録とネット上に公開されているデータベースを調査し、さらに、文学館の所蔵資料、すなわち文学アーカイブズを編成記述することは可能か検討した。

2. 文学館の目録とデータベース

(1) 目録

日本近代文学館は、文学資料を収集・保存・展示する場といった意味で「文学館」という名

16) 根本前掲書、p.20。

17) 渡辺浩一「現代のアーカイブズとアーキビストの役割」(国文学研究資料館『令和2年度アーカイブズ・カレッジ テキスト』、2020年、p.17)。初出、渡辺浩一「アーカイブズ資源論」(国文学研究資料館『平成26年度アーカイブズ・カレッジ テキスト』、2014年)。

18) 渡辺前掲論文、p.18。

19) 安藤正人「史料整理と検索手段作成の理論と技法」(『史料館研究紀要』17号、1985年、p.90)。

20) 国際文書館評議会「ICA アーキビストの倫理綱領」(1996年)。参照元、全国歴史資料保存機関連絡協議会<http://www.jsai.jp/file/archi.html> (2021年9月27日最終確認)。

21) 藤實久美子「アーカイブズ資源論」(国文学研究資料館『令和2年度アーカイブズ・カレッジ テキスト』、2020年、p.20)。

称が初めて使用された施設であり、全国文学館協議会の発足を呼びかけ、その事務局が置かれていることから、現在でもいわば文学館界の中心を担う存在である。日本の近代文学に関する資料を地域や特定の文学者にこだわることなく総合的に収集し、現在120万点²²⁾の資料を収蔵する。2018（平成30）年11月時点で、文学者本人や遺族、関係者から寄贈・寄託された164件²³⁾の文庫・コレクションを管理しており、雑誌を含む図書のみ、文庫、図書のほか原稿や遺品などを含む文庫、書簡のみのコレクションなどさまざまな資料群がある。そのうち、34件²⁴⁾には目録が刊行されており、概ね、図書・雑誌と、それ以外の「特別資料」（原稿・草稿・切抜・書簡・書画・遺品・書入れ本など）の形態ごとに分類、排列されている。

『太宰治文庫目録』²⁵⁾は1992（平成4）年に刊行された。これは太宰治の遺族である津島家から寄贈された資料群の目録であり、原稿、図書、雑誌、切抜き、その他の資料の形態別に分類され、原稿は発表年順または執筆年順、図書は刊行年順、雑誌は誌名の五十音順、切抜きは年代順に排列されている²⁶⁾。さらに2017（平成29）年に太宰治文庫目録の増補版²⁷⁾が刊行されている。これは2部構成で、第1部は1992（平成4）年以降に津島家から寄贈された資料を含んだ「太宰治文庫」の目録、第2部は日本近代文学館所蔵のその他の太宰治関係資料の目録となっている。出所によって資料を区別し、文庫以外の資料も目録に含むことで利用の便宜が図られている。また、第1部については、原稿、草稿、学生時代の英作文・英語教科書、書簡、切抜などの「特別資料」と「図書」、「雑誌」、さらに「中畑慶吉関係文書」、「津島美知子関連資料」に分けられている。「中畑慶吉関係文書」は、上京後の太宰の世話をした中畑慶吉が一括にした資料を太宰の妻である美知子夫人が保管していたものであり²⁸⁾、受贈時の原秩序が保たれている。「津島美知子関連資料」には、美知子夫人による『回想の太宰治』の執筆に関連する資料などがあり、資料の性質によって区別されていることがわかる。なお、排列順は1992（平成4）年刊行の目録と同様だが、図書は太宰の著作と作品執筆の際に参照した資料に分けられ、前者は刊行年順、後者は著者名の五十音順となっている。

34冊の目録のうちほとんどは、本人や遺族、関係者、収集家からの寄贈・寄託者ごとに刊行されていた。しかし、『高橋和巳文庫目録』と『結城信一コレクション目録』には遺族からの寄贈資料と他者からの寄贈資料がひとつの文庫にまとめられていることが記載されている²⁹⁾。『高橋和巳文庫目録』の凡例には関係者の好意によってひとつの文庫で一括管理され、図書は

22) 公益財団法人日本近代文学館「成り立ち」<https://www.bungakukan.or.jp/about/origin/>（2021年9月27日最終確認）。

23) 公益財団法人日本近代文学館「文庫・コレクション一覧」https://www.bungakukan.or.jp/collection_search/（2021年9月27日最終確認）。

24) 公益財団法人日本近代文学館「目録」<https://www.bungakukan.or.jp/webshop/mokuroku/>（2021年9月27日最終確認）。

25) 日本近代文学館編『太宰治文庫目録』（日本近代文学館所蔵資料目録23、1992年）。

26) 日本近代文学館（1992年）、前掲書、「凡例」。

27) 日本近代文学館編『太宰治文庫目録 増補版』（日本近代文学館所蔵資料目録33、2017年）。

28) 日本近代文学館（2017年）、前掲書、「凡例」。中畑慶吉関係文書が美知子夫人の保管となった経緯や資料の概要は、津島美知子『回想の太宰治』（増補改訂版、人文書院、1997年）、安藤宏「新資料・中畑慶吉保管文書より」『太宰治研究17』（和泉書院、1999年）に詳しい。

29) 日本近代文学館編「凡例」『高橋和巳文庫目録』（日本近代文学館所蔵資料目録28、2002年）。

日本近代文学館編「凡例」『結城信一コレクション目録』（日本近代文学館所蔵資料目録30、2006年）。

遺族から、特別資料はその他諸氏からの収蔵資料である旨記されている³⁰⁾。『結城信一コレクション』も凡例に寄贈の概要が記され、資料の出所は判別できるようになっている³¹⁾。

日本近代文学館設立の中心人物に数えられる小田切進が発起人の一人であり、日本近代文学館とは姉妹館の関係にある神奈川近代文学館では、現在19冊³²⁾の文庫目録が刊行されており、こちらも図書・雑誌とそれ以外の特別資料と形態ごとに分類、排列されている。本人や遺族の寄贈資料がひとつの文庫として一括管理されているものが多いなかで、『添田啞蟬坊・知道文庫目録』と『楠本憲吉文庫目録』のように、諸氏からの寄贈資料や館の購入資料が一括管理されている例³³⁾もあった。これら目録の巻頭にある「刊行にあたって」には、資料の概要が記されているが、資料の出所の判別はできなかった。

日本近代文学館と神奈川近代文学館の場合、おおむね寄贈・寄託者ごとに文庫やコレクションが管理されていた。階層構造に根差して編成された目録はなく、図書・雑誌、原稿、遺品といった形態別に分類された目録であった。『太宰治文庫目録増補版』からは、資料の原秩序を保ち、性質から資料を分類する姿勢が窺われた。『高橋和巳文庫目録』など、出所の違う資料がひとつの文庫として管理されることがままあるのは、文学アーカイブズの場合、資料の出所よりも、著作物を生産する一文学者に関する資料であることが重要だからではないかと推察する。そのため、日本近代文学館や神奈川近代文学館の文庫・コレクションは出所も重視されているが、一文学者を主題とした管理がなされていると理解したほうが実態に近いと考える。文庫・コレクションの名前も、ほとんどが寄贈者ではなく文学者の名前であることもその証左といえよう。

個人記念館の場合、基本的に収集資料は一個人に関するもののみとなるが、芦屋市谷崎潤一郎記念館のように『芦屋市谷崎潤一郎記念館資料集 (三) 久保家所蔵 谷崎潤一郎 久保義治・一枝宛書簡』『谷崎潤一郎資料目録 真三堂文庫目録』『谷崎潤一郎資料目録 近藤良貞文庫目録』³⁴⁾と資料の寄贈者ごとの目録が刊行されている例もあった。

加えて、ネット上に目録を公開する例は少なく、全国文学館協議会加入館のなかでは町田市民文学館と姫路文学館の2館でしか確認できなかった³⁵⁾。また、『林芙美子資料目録』³⁶⁾は北九

30) 日本近代文学館編 (2002年)、前掲書、「凡例」。

31) 日本近代文学館編 (2006年)、前掲書、「凡例」。

32) 公益財団法人神奈川文学振興会「刊行物一覧」(『神奈川近代文学館30年誌1984—2013』2015年、pp.234-235)。https://www.kanabun.or.jp/uploads/2015/10/KMML30nensi_9.pdf (2021年9月27日最終確認)。

33) 神奈川文学振興会「刊行にあたって」『添田啞蟬坊・知道文庫目録』(県立神奈川近代文学館収蔵文庫目録8、1994年)。神奈川文学振興会「刊行にあたって」『楠本憲吉文庫目録』(県立神奈川近代文学館収蔵文庫目録14、2005年)。

34) 芦屋市谷崎潤一郎記念館編『谷崎潤一郎資料目録 真三堂文庫目録』(芦屋市谷崎潤一郎記念館、2005年)。芦屋市谷崎潤一郎記念館編『谷崎潤一郎資料目録 近藤良貞文庫目録』(芦屋市谷崎潤一郎記念館、2005年)。芦屋市谷崎潤一郎記念館編『芦屋市谷崎潤一郎記念館資料集 (三) 久保家所蔵 谷崎潤一郎 久保義治・一枝宛書簡』(芦屋市谷崎潤一郎記念館、1999年)。

35) 町田市民文学館「資料検索・収蔵品目録」https://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/bunka_geijutsu/cul/cul08Literature/kensaku_mokuroku/index.html (2021年9月27日最終確認)。姫路文学館「主な収蔵資料」http://www.himejibungakukan.jp/gaiyou/omonasiryo/ (2021年9月27日最終確認)。

36) 新宿区立新宿歴史博物館・北九州市立文学館・尾道市・かごしま近代文学館編『林芙美子資料目録』(新宿未来創造財団新宿区立新宿歴史博物館、2014年)。

州市立文学館、尾道市立美術館、かごしま近代文学館、新宿歴史博物館の4館による協働企画展「生誕110年 林芙美子展 一風も吹くなり 雲も光るなり」の成果として刊行された資料目録であり、4館の所蔵資料が収録されている。一文学者の資料が全国各所に所蔵されることは多く、このように横断的な目録の刊行は利用者にとって望まれる形であろう。

（2）データベース

日本近代文学館のウェブサイトには「図書・雑誌検索」³⁷⁾と「写真検索」³⁸⁾、原稿・書簡・遺品など図書・雑誌以外の資料の「特別資料検索」³⁹⁾と形態別にデータベースがあり、それぞれキーワードで検索ができる。「図書・雑誌検索」では文庫・コレクションでの絞り込み検索はできないが、例えば太宰治の『晩年』（砂子屋書房、1936年刊）を検索すると、別置記号「D」のついた資料が表示される（図1「図書・雑誌検索 太宰治『晩年』（砂子屋書房、1936年）」を

図書雑誌詳細

書誌番号	BS027382
表題	晩年 / 太宰治著
出版地	東京
出版者	砂子屋書房
出版年月日	昭和11.6.25
数量・大きさ	241p ; 24cm
内容著作注記	葉
内容著作注記	思ひ出
内容著作注記	魚服記
内容著作注記	列車
内容著作注記	地球図
内容著作注記	猿ヶ島
内容著作注記	雀こ
内容著作注記	道化の華
内容著作注記	猿面冠者
内容著作注記	逆行
内容著作注記	彼は昔の彼ならず
内容著作注記	ロマネスク
内容著作注記	玩具
内容著作注記	陰火
内容著作注記	めくら草紙
著者標目	太宰, 治(1909-1948)
参照ID	BA89239100

所蔵一覧

別置記号	請求記号	所蔵ID	所蔵館
D	ダザ 148	BS027382	本館

図1 図書・雑誌検索 太宰治『晩年』（砂子屋書房、1936年）

37) 公益財団法人日本近代文学館「図書・雑誌検索」<https://webpac.bungakukan.or.jp/lx/search.aspx?iframe=true&width=104%&height=102%>（2021年9月27日最終確認）。

38) 公益財団法人日本近代文学館「写真検索」<https://webpac.bungakukan.or.jp/pic/search.aspx>（2021年9月27日最終確認）。

39) 公益財団法人日本近代文学館「特別資料検索」<https://webpac.bungakukan.or.jp/sp/login.aspx?ReturnUrl=%2fsp%2fusers%2fspsearch.aspx>（2021年9月27日最終確認）。

参照)⁴⁰⁾。『太宰治文庫目録』にも収録された資料であり、別置記号は文庫・コレクションごとの管理を表すと考えられるが、文庫・コレクションを指定した検索はできない。

「写真検索」は出版や展示、放送での利用希望に対応することが主旨のようで、サンプル画像が表示されている。文学者の肖像や初版本、作品の初出誌の写真が多く、特別資料として分類された写真は含まれていないようである。「特別資料検索」における種別は「原稿（原稿・草稿・手入れ原稿）、書簡、日記、自筆文書（他の肉筆資料に分類されないノート・メモなど）、筆墨、絵画、美術工芸、切抜、印刷物、文書、写真、遺品、図書（特別資料として整理された書入れ本など）、雑誌（同上）、その他」⁴¹⁾となっており、それぞれ指定して絞り込みができる。トップ画面には文庫・コレクション名の一覧表示があり、計139件の文庫・コレクションが選択できる。

神奈川近代文学館、鎌倉文学館、姫路文学館も同様に図書・雑誌検索と特別資料検索（姫路文学館は「収蔵品検索」）が公開されており、原稿などの形態別に指定して検索できるが、文庫やコレクションの指定はできない。ただし、鎌倉文学館は蔵書検索においてのみ、姫路文学館は図書検索と収蔵品検索の両方で、文学者名を指定して絞り込みができる。

なお、日本近代文学館、神奈川近代文学館、姫路文学館の3館の特別資料検索にはパスワードがかけられており、利用にあたり事前に名前や連絡先などを登録する必要がある。3館のうち最も早い2004（平成16）年に特別資料検索を公開した神奈川近代文学館は、「著作権やプライバシーの問題もあり、閲覧を研究目的に限定して事前の申し込みをお願いしていることなどから、不特定の利用者に広くそのデータを公開することに懸念があった」⁴²⁾こと、「興味本位の閲覧申し込みに対しハードルを設ける意味で、アクセスにパスワードを用いる登録制を行っている」⁴³⁾と明かしている。2016（平成28）年に特別資料検索を公開した姫路文学館、2018（平成30）年に公開した日本近代文学館もこれを踏襲したものと考えられる。

文学アーカイブズを取り扱うデータベースのネット上での公開は、全国文学館協議会加入館104館のうち27館で確認できた（表1「データベースを公開している文学館」を参照）。

岡野の2009（平成21）年の論文である「文学館の検索システムの現状と課題」⁴⁴⁾では、データベースを提供している文学館として12館を挙げており、以後12年間のうちに公開数は少ないながらも2倍に増加していることがわかる。うち、7館は図書・雑誌の蔵書検索のみに限られ、20館は原稿や書簡といった特別資料を検索できるデータベースを公開している。ほとんどは資料が形態別に分類され、編成記述の形で公開されているものはなかった。しかし、資料の文庫・コレクションや文学者名で指定できるようになっているものが多く、文学アーカイブズのデータベースの特徴として捉えられる。

また、大佛次郎記念館では形態別に分類された階層図から資料が選択できるほか、キーワード検索もできるようになっている（図2「大佛次郎記念館「所蔵資料目録」」を参照）⁴⁵⁾。

40) 公益財団法人日本近代文学館前掲サイト、「図書・雑誌検索」。

41) 公益財団法人日本近代文学館前掲サイト、「特別資料検索」。

42) 高橋祐子「OPAC公開後の特別資料の利用状況について」（『全国文学館協議会会報』35号、2007年、p.10）。

43) 高橋前掲論文、p.11。

44) 岡野裕行「文学館の検索システムの現状と課題」（『情報メディア研究』7巻1号、2009年、p.47）。

45) 大佛次郎記念館「所蔵資料」<http://osaragi.yafjp.org/archives/>（2021年9月27日最終確認）。

表1 データベースを公開している文学館

(2021年9月27日、最終確認)

施設名	データベース名	備考
図書・雑誌/特別資料		
1 日本近代文学館	図書・雑誌検索	
	写真検索	
	特別資料検索	登録制 文庫・コレクションの指定可
2 神奈川県立神奈川近代文学館	図書・雑誌検索	
	特別資料検索	登録制
3 鎌倉文学館	蔵書検索	文学者名で指定可
	資料検索	
4 姫路文学館	図書検索	雑誌を含む
	収蔵品検索	登録制 文学者名で指定可
図書・雑誌、特別資料統合		
5 あきた文学資料館	デジタルアーカイブあきた文学資料館	
6 仙台文学館	仙台文学館所蔵資料データベース	
7 水と緑と詩のまち前橋文学館	収蔵資料検索	文学者名で指定可
8 市川市文学ミュージアム	所蔵資料データベース検索	コレクションの指定可
9 調布市武者小路実篤記念館	収蔵品データベース	個人記念館
10 山梨県立文学館	蔵書検索	「特殊資料」（原稿、書簡など）を含む
11 中原中也記念館	収蔵資料データベース	個人記念館
12 徳島県立文学書道館	作品資料検索	文学者名で指定可
13 かごしま近代文学館	かごしまデジタルミュージアム	
14 久留島武彦記念館	収蔵品データベース	個人記念館
特別資料のみ		
15 弘前市立郷土文学館	弘前市立弘前図書館／おくゆかしき津軽の古典籍	文学者名で指定可
16 大宮図書館 文学資料コーナー	さいたま市立大宮図書館／おおみやデジタル文学館 一歌人・大西民子	個人の資料のみ
17 東京都江戸東京博物館	デジタルアーカイブス	文学に関しては東京都近代文学博物館移管資料がある
18 大佛次郎記念館	所蔵資料目録	個人記念館 階層図（自著の図書を含む）あり
19 福井県ふるさと文学館	デジタルアーカイブ福井	
20 菊池寛記念館	収蔵品データベース	個人記念館 写真資料のみ
蔵書のみ		
21 青森県近代文学館	青森県近代文学館OPAC	
22 日本現代詩歌文学館	資料検索	
23 遼筆堂文庫	川西町立図書館/遼筆堂文庫蔵書検索	個人記念館
24 群馬県立土屋文明記念文学館	蔵書検索	
25 さいたま文学館	蔵書検索	
26 高知県立文学館	収蔵資料データベース	
27 福岡市文学館	資料検索	文学者名で指定可

所蔵資料目録			
特別資料	原稿	→ 原稿自筆	アイテム数:315
	美術	→ 挿絵類	アイテム数:86
		→ 愛蔵品	アイテム数:301
	大佛次郎関連資料I	→ 台本	アイテム数:234
	大佛次郎関連資料II	→ 地図類	アイテム数:55
		→ ポスター	アイテム数:69
		→ S Pレコード	アイテム数:342
定期刊行物		→ 洋雑誌	アイテム数:274
図書		→ 自著	アイテム数:2919

図2 大佛次郎記念館「所蔵資料目録」

このように文学館の目録とネット上のデータベースを調査した結果、形態ごとの分類と文学者ごとの文庫・コレクションといった資料群による管理が主流であることがわかった。また、文学作品に関する資料であることや、近代の個人アーカイブズであるといった性格上、著作権とプライバシー保護のため、利用に登録制を敷くものも認められた。

3. 文学アーカイブズの編成記述

文学館の文学アーカイブズを「出所・原秩序・階層構造に根ざしてその本質・構造を分析」⁴⁶⁾すること、すなわち編成記述の形式での目録化は可能なのだろうか。具体的に三鷹市山本有三記念館の所蔵資料を例にとりあげ、編成記述のシリーズ設定について検討したい。

まず、山本有三と記念館についておさえておく。山本有三は、1887（明治20）年に現在の栃木県栃木市に生まれた。1910（明治43）年に戯曲「穴」でデビューし劇作家として活躍した後、長編小説「生きとし生けるもの」を皮切りに「波」「風」などを『東京・大阪朝日新聞』に連載した。代表作に「路傍の石」や戯曲「米百俵」などがある。ほかに児童向け叢書の『日本少国民文庫』の編集や、子どもたちに蔵書を開放する「ミタカ少国民文庫」といった活動を行った。戦後は参議院議員選挙に出馬して当選、国立国語研究所の設立などに尽力した。1973（昭和48）年に「路傍の石」以来36年ぶりの新聞連載である「濁流 雑談近衛文麿」を『毎日新聞』に連載するも41回で中断し、翌年86歳で亡くなった。

三鷹市山本有三記念館は、1936（昭和11）年から1946（昭和21）年の10年間、山本有三が家族とともに住んだ洋館で、1996（平成8）年に開館した。遺族や関係者から三鷹市へ寄贈された資料や購入した資料をもとに、山本有三の生涯や作品を紹介している。所蔵資料のうち、1985（昭和60）年3月以降、山本有三の遺族から寄贈された資料の編成記述を試みるため、シリーズ設定を検討する。以下、この寄贈資料群を山本家資料と呼ぶ。シリーズ設定には、2018（平成30）年刊行の『三鷹市山本有三記念館所蔵資料目録』⁴⁷⁾を参考にした。本目録は、原稿や書簡などの特別資料、美術品と家具の一般資料、視聴覚資料、印刷物、図書、雑誌、雑資料と形態別に分類、排列されている⁴⁸⁾。また、遺族と関係者からの寄贈資料が一緒に排列されているが、「受入」欄において資料ごとの受入経緯が示されている。

山本家資料は近代の個人アーカイブズにあたる。個人の社会的役割および個人的行為をシリーズとした山崎元幹文書と鈴木莊六文書での実践が紹介されている加藤聖文の「近現代個人文書の特性と編成記述—可変的なシリーズ設定のあり方—」⁴⁹⁾が参考になった。

まずシリーズ項目には「公的活動（作家）」、「公的活動（政治家）」、「公的活動（その他）」、「個人」の4つを挙げた（図3「山本家資料のシリーズ設定案」を参照）。

46) 藤實久美子「アーカイブズ資源論」（国文学研究資料館『令和2年度アーカイブズ・カレッジ テキスト』、2020年、p.20）。

47) 三鷹市山本有三記念館『三鷹市山本有三記念館所蔵資料目録』（2018年）。

48) 三鷹市山本有三記念館前掲書。

49) 加藤聖文「近現代個人文書の特性と編成記述—可変的なシリーズ設定のあり方—」（国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版、2014年、pp.181-199）。

アーカイブズとしての文学館（橋口）

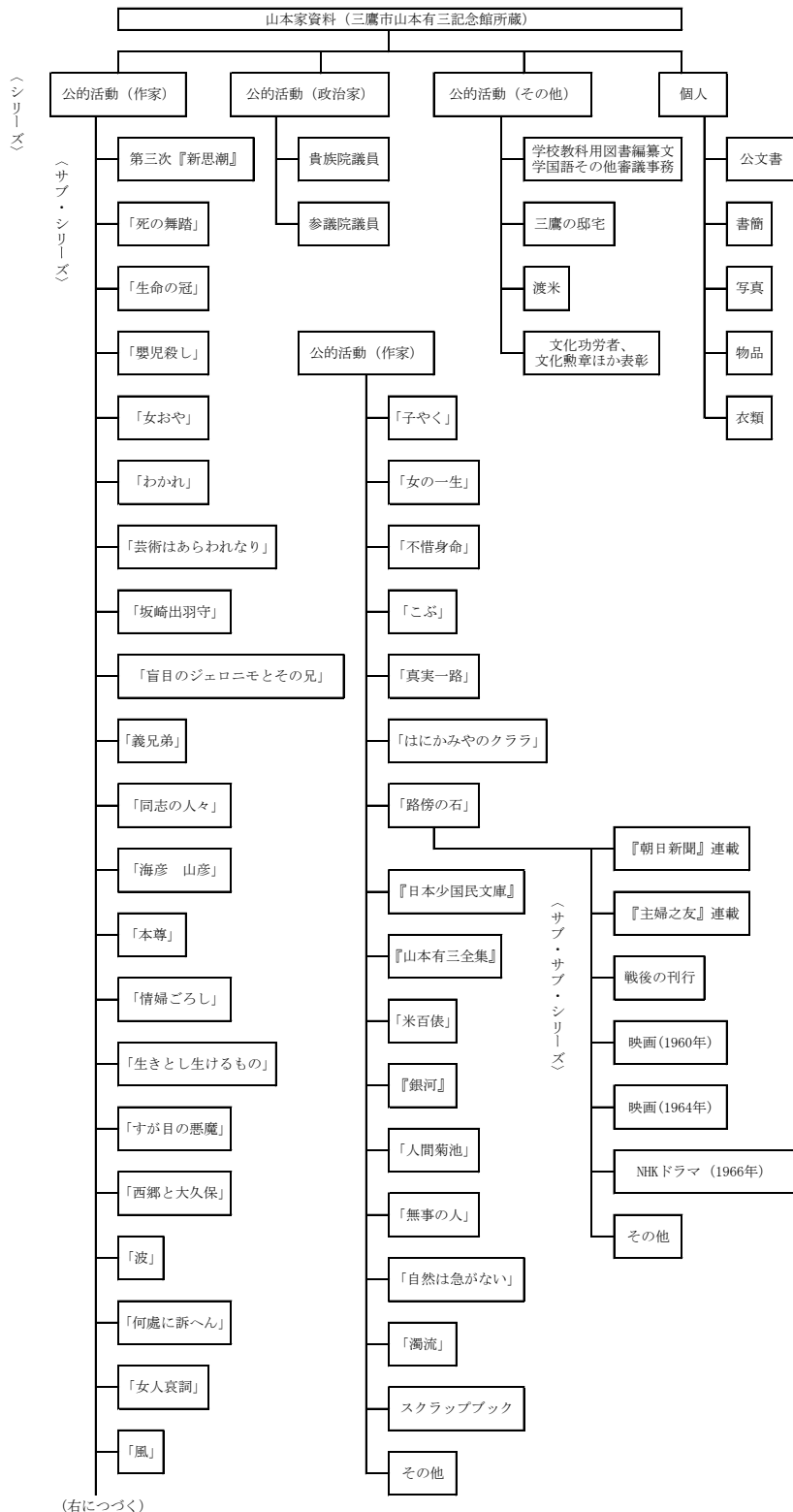


図3 山本家資料のシリーズ設定案

加藤論文の例の山崎元幹と鈴木莊六はそれぞれ南満州鉄道や日本軍といった組織に所属していたため、シリーズやサブ・シリーズは役職が軸になっている。しかし、山本家資料の場合は組織体系も役職もない個人の作家活動に関する資料が多い。それゆえ、「公的活動（作家）」のもとには、タイトルごとのサブ・シリーズを時代順に編成した。具体的な資料としては草稿、原稿、雑誌、図書、作品に関わる書簡、作品のドラマ化・映画化に関する資料などがある。図書、雑誌は本来、原秩序を保つために蔵書として一括管理されるべきである。しかし、初出であったり、単行本として刊行されたりと文学作品にとって重要な資料であり、山本有三が所持していた当時の蔵書の配架順などは既に失われているため、文学アーカイブズとしての利用の便宜をはかり、タイトルごとのシリーズに各資料を収める。蔵書は別途一覧を付す必要があるだろう。映像化作品は山本有三が主力となって活動したものではないが、同じシリーズ内にまとめることで作品の変遷を辿ることができるのではないかと考えた。第三次『新思潮』、『日本少国民文庫』、『山本有三全集』、『銀河』は、山本有三が創刊にかかわっている雑誌または叢書のため、そのまま項目に数えた。さらに、一冊ごとにまとまったスクラップブックの項目を設け、その他には、作家同士の対談や他の文学者による特定の作品にこだわらない評論記事、タイトルごとのサブ・シリーズに収まらなかった図書、雑誌を含めた。

なかでも「路傍の石」については、サブ・サブ・シリーズの項目を検討し、簡易的に編成記述を行った（表2「山本家資料内、サブ・シリーズ「路傍の石」の編成記述案」を参照）。書式は日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所の公開する「山崎元幹文書」を参考にした⁵⁰⁾。

「路傍の石」は、1937（昭和12）年1月1日から6月18日まで第一部が『東京・大阪朝日新聞』に連載された。しかし、第二部は日中戦争の影響により同紙で連載できず、翌年『主婦之友』で「新篇・路傍の石」として改稿のうえ第一部から連載を始めた。ところが、1940（昭和15）年に内務省からの検閲、干渉により自由に作品を執筆できないことから連載を中止し、作品は未完に終わった。戦後は『主婦之友』で連載した「新篇・路傍の石」の最後の五章分を除いた形で刊行されたのち、現在は五章分を含めた『主婦之友』版が読み継がれている。1938（昭和13）年、1955（昭和30）年、1960（昭和40）年、1964（昭和44）年と4度にわたって映画化され、1966（昭和46）年にはNHKでドラマにもなっている。この成立過程から、山本家資料内の「路傍の石」に関する資料はサブ・サブ・シリーズに「『朝日新聞』連載」、「『主婦之友』連載」、さらに「映画（1960年）」、「映画（1964年）」、「NHKドラマ（1966年）」、「その他」が挙げられた。記述に際しては、列に「著者／作成者」「形態」「出版社」「刊行年」を付した。

「公的活動（政治家）」では戦前の貴族院議員、戦後の参議院議員出馬から当選後の資料が含まれ、「公的活動（その他）」には、1940（昭和15）年に委嘱された「学校教科用図書編纂文学国語其他審議事務」、1956（昭和31）年のミシガン大学による招待での渡米、文化勲章受章などの表彰に関するシリーズを編成した。記念館の建物である三鷹の邸宅は、戦後GHQに接収され、返還された後は山本有三によって東京都に寄贈されるなど公的な関わりが深いため、「公的活動（その他）」に含んだ。「個人」には、学生時代の卒業証書などの公文書、これまでのシ

50) 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所「山崎元幹文書」https://d-arch.ide.go.jp/asia_archive/collections/Yamazaki/index.html（2021年9月27日最終確認）。

表2 山本家資料内、サブ・シリーズ「路傍の石」の編成記述案

記述レベル	タイトル	著者/作成者	形態	出版社	刊行年
シリーズ	公的活動（作家）				
省略					
サブ・シリーズ	路傍の石				
サブ・サブ・シリーズ	『朝日新聞』連載				
アイテム	路傍の石 111	山本有三	原稿		1937年1月～6月
アイテム	路傍の石 151	山本有三	原稿		1937年1月～6月
アイテム	路傍の石 158	山本有三	原稿		1937年1月～6月
アイテム	路傍の石 160	山本有三	原稿		1937年1月～6月
アイテム	路傍の石 164	山本有三	原稿		1937年1月～6月
サブ・サブ・シリーズ	『主婦之友』連載				
アイテム	路傍の石 お月さまはなぜ落ちないのか	山本有三	原稿		1940年7月
サブ・サブ・シリーズ	戦後の刊行				
アイテム	『縮刷 日本文学全集 大正小説篇』	山本有三	図書	日本週報社	1961年
アイテム	主婦の友新書『路傍の石』	山本有三	図書	主婦の友社	1963年
アイテム	『アイドルブックス2 路傍の石』	山本有三	図書	ポプラ社	1965年
アイテム	『アイドルブックス13 路傍の石』	山本有三	図書	ポプラ社	1965年
アイテム	『少年少女世界の名作文学 第49巻 日本編5』	山本有三	図書	小学館	1968年
アイテム	『アイドルブックス2 ジュニア文学名作選 路傍の石』	山本有三	図書	ポプラ社	1971年
アイテム	『旺文社ジュニア図書館 路傍の石』	山本有三	図書	旺文社	1977年
省略					
サブ・サブ・シリーズ	映画（1960年）				
アイテム	ポスター		印刷物	東宝	1960年
アイテム	「文豪と少年」路傍の石”三人目の吾一”『週刊文春』第2巻第19号		雑誌	文藝春秋社	1960年
サブ・サブ・シリーズ	映画（1964年）				
アイテム	「家城演出の現代性に注目「路傍の石」（東映）四度目の映画化」		スクラップ	朝日新聞	1964年6月17日
アイテム	「東映映画「路傍の石」から明治の女」		スクラップ	産経新聞	1964年5月2日
アイテム	「理想的少年像を描く「路傍の石」（東映）」		スクラップ	毎日新聞	1964年6月13日
サブ・サブ・シリーズ	NHKドラマ（1966年）				
アイテム	「やっと捜し出た”陸蒸気”「路傍の石」京都の私鉄借り切り無事撮影」		スクラップ	東京新聞	1966年4月11日
サブ・サブ・シリーズ	その他				
アイテム	「たった1人しかない自分を」エレクトーン演奏		オープンリール式テープ		不明
アイテム	路傍の石 412-1～412-9		オープンリール式テープ		不明
省略					

リーズには含まれなかった家族との書簡や写真をはじめ、衣類や愛用の家具、文房具などの遺品を形態別に分類した。

山本家資料のシリーズ設定を検討した結果、タイトルごとのシリーズでは項目がかなり多くなってしまうことが判明した。タイトルそれぞれにサブ・サブ・シリーズも編成することになれば、資料の全体像はさらに広がる。山本有三は寡作の作家で、『山本有三全集』（新潮社、1976年—1977年）には戯曲、小説、随筆を含めて182タイトルが収録される。例えば、多作で知られる吉村昭は小説だけでも380作以上⁵¹⁾にのぼるといわれており、同様にタイトルごとに項目を設定するとシリーズ項目が膨大になってしまう。また、時代順にタイトルが並び、戯曲

51) 桑原文明『吉村昭資料集 3』（吉村昭研究会、2018年、p.226）には創作370作が数えられている。さらに、桑原文明「少年読物・ジュニア文芸書誌」（『吉村昭研究』53号、2021年、p.67）において初期の14作が新たに公表された。

や小説、翻訳、随筆といった種類は整理されていないため煩雑である。タイトルの後ろに「(小説)」や「(戯曲)」と示すなど工夫が必要であろう。そして、整理にあたっては資料一点一点の内容を確認しなければならず、形態ごとの分類に比べてかなりの時間と知識を要する。しかし、従来の形態別の目録では関連資料が散らばってしまい、データベースのキーワード検索だけでは、資料の全体像も把握できないなかで、任意のキーワードに適合したものしか結果に反映されず、検索漏れに気がつくことはできない。複雑でも階層構造にすることで、特定の作品に関してどのような資料があるのか一覧でき、作品の変遷を捉えられる。

清原和之はアーカイブズ組織において資料を「かたまり」として維持・管理する理由を以下のように述べている。

日々の活動の記録であるアーカイブズ資料はそれが生み出され、利用され、遺され、捨てられる意味をもち、その活動の過程を反映して、「かたまり」として蓄積されていく。すなわち、資料の個々の内容ではなく、資料が生み出され、機能したコンテキストとその資料がたどったプロセスこそが資料の存在に価値を与えるものと考えられる⁵²⁾。

文学作品が生まれる時にも、取材メモや取材資料が草稿となり、原稿となり、雑誌に連載され、さらに単行本や全集に改訂されながら収録されるというプロセスがある。文学アーカイブズも編成記述を行うことによって新たな側面を照らすことができるものとする。

おわりに

以上、アーカイブズ組織の特徴のひとつである「出所・原秩序・階層構造に根ざしてその本質・構造を分析」という観点から、文学館の目録とネット上に公開されたデータベースを調査し、アーカイブズとしての文学館を検討、考察した。定義や基本機能からみれば文学館はアーカイブズを扱うアーカイブズ組織といえたが、目録やデータベースの現状からはアーカイブズ組織とは異なる状況がみてとれた。

日本近代文学館と神奈川近代文学館の場合、文庫・コレクションは寄贈・寄託者ごとに管理されているものが多いものの、階層構造に根差して編成された目録はなく、図書・雑誌、原稿、遺品といった形態別に分類された目録であることが明らかとなった。なかには、資料の原秩序を保ち、その性質から資料を分類する姿勢が窺われるものもあったが、出所の違う資料がひとつの文庫として管理されている場合もあった。これは、資料の出所よりも一文学者に特化した資料であることが重視されているためと考える。

さらに、文学者と文学作品に直接関わる文学アーカイブズのなかでも近代の資料は、プライバシーと著作権の保護が必要なため、データベースや目録の公開はあまり進んでいないこともわかった。

加えて文学アーカイブズの編成記述を試みるため、三鷹市山本有三記念館所蔵の山本家資料のシリーズ設定を行った。作品タイトルごとにシリーズ設定を行い、個人の活動である作家活動の階層構造化ができたことにより、他の資料群や他館の資料との照合も容易になり、利用者

52) 清原和之「アーカイブズ情報資源の共有と継承—集団記憶の管理を担うのは誰か」(九州史学会・公益財団法人史学会編『過去を伝える、今を遺す』山川出版社、2015年、p.119)。

も作品がどんな変遷を辿ったのか概観することができる。しかし、形態別分類に比べると資料の全体像が広がってしまい、資料群によってはシリーズを一覧するのに困難が予想される。また資料整理にかなりの時間と知識が必要になることも明らかになった。形態別分類が既に主流となっている文学アーカイブズで、新たに編成記述での目録作成を導入していくことは必要ではないかもしれないが、併用することで作品についてより知りたいという初学者の要望に応えることや研究者の手間を減らすことができるのではないかと考える。

今回の調査では調べきれなかったが、国際的には、ICAにSLA (Section on Literary and Artistic Archives) という文学及び芸術分野のセクションがある。海外ではどのように文学アーカイブズを分析し、どのような目録やデータベースを構築しているのか等に関して精査することは、文学アーカイブズはもちろん文学館の発展のためにも必要なことであろう。

謝辞

本稿は2020（令和2）年度アーカイブズ・カレッジ（短期コース）修了論文「アーカイブズとしての文学館」に大幅な加筆・修正を行ったものです。原論文の執筆にあたり、新型コロナウイルス感染症流行下において対面とオンラインのハイブリッド型のアーカイブズ・カレッジ開講にご尽力くださった講師の先生方と国文学研究資料館のスタッフの方々に厚く御礼申し上げます。また、本稿の投稿については国文学研究資料館の関係各位の御助力によって叶えられましたことを心より御礼申し上げます。